

こちら営農・技術センター

ラウンドアップによるスギナ防除

生育盛期が散布適期 深く根に移行して枯らす

農薬研究部

スギナは、ほかの雑草にくらべて地下部の根茎や塊茎が非常に発達しており、しかもかなり深い部分にまで存在している。このため、地上部を枯らしただけでは残った根からまた新しい芽が再生してしまう。

そこで、スギナ防除では、地上部だけでなく、いかにして地下部まで枯らすかが重要なポイントとなる。

【散布1年後の再生を抑制】

今までスギナに有効とされていた除草剤の多くは、薬剤散布後1～2ヵ月もすれば、ほぼ元どおりにスギナが再生してしまうというケースが多かった。

しかし、ラウンドアップなら、散布1年後のスギナの再生量を激減させることがで

きる。

写真-1、2、3は、全農営農・技術センター内で実施した試験結果である。ラウンドアップを25倍に希釈した液を10a当たり50ℓ散布することで、散布翌春のスギナの再生量を著しく減少させることができた(ラウンドアップの薬量は10a当たり2ℓ)。

表-1 ラウンドアップのスギナに対する防除効果(圃場試験)

ラウンドアップ散布時の生育ステージ*1	ラウンドアップ散布日	散布6週目の地上部残草量*2	散布翌春の再生量('97年4月9日)*2
生育初期	'96年4月8日		×
生育盛期	'96年5月7日		○

*1：生育初期＝草丈10～17cm、枝分かれした側枝が短い時期
生育盛期＝草丈30～50cm、枝分かれした側枝が長く伸びた時期

*2：＝無処理区比0～10%、○＝無処理区比10～25%、
＝無処理区比25～50%、×＝無処理区比50～75%

ラウンドアップ散布薬量：10a当たり2ℓ

【散布適期は生育盛期】

表-1にラウンドアップの散布時期をかねて実施した圃場試験の結果を示した。

スギナの草丈が小さくて、枝分かれした側枝がまだ短い時期(生育初期)にラウンドアップを散布しても、翌春の再生をおさえる力は不十分であったが、草丈が30～



写真-1 ラウンドアップ散布時の状況('95.5.18)



写真-2 ラウンドアップ散布1年後
(ラウンドアップ2ℓ/10a、'96.4.12撮影)



写真-3 無処理区1年後('96.4.12撮影)

50cmで、枝分かれした側枝が長く伸びた時期（生育盛期）に散布すると、翌春の再生は著しくおさえられた。

つぎに、ポットでも同様な試験をし、その結果を図 - 1 に示した。

スギナの生育初期、生育盛期、および全体的に黄色味を帯び、茎の先端部分が自然に枯れはじめた時期（衰退期）の3時期にラウンドアップを散布した。その結果、生育初期と衰退期の散布では、ラウンドアップの効果が不十分であったが、生育盛期の散布では、地下部の重さが無処理区の10%以下になり、きわめて高い効果が認められた。

以上の試験結果から、ラウンドアップの散布適期は、草丈が十分に伸長し、枝分かれした側枝が長く伸びた時期であることがわかった。

なお、図 - 2 にスギナの各生育ステージでの形態を示した。

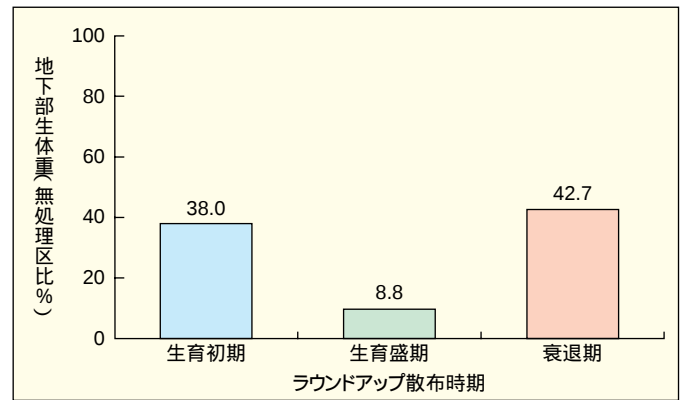
【いかにして地下部を枯らすか】

スギナ防除は、“いかにして地下部を枯らすか”がポイントであり、雑草の根部への移行性にすぐれたラウンドアップは、き

わめて有効な除草剤である。

しかし、スギナに対しては散布時期によって効果が変動するので注意しなければならない。散布時期が早すぎても遅すぎても効果が不十分となるため、スギナが盛んに生育している時期をねらって散布することを心がけたい。

図 - 1 ラウンドアップ散布8週後のスギナの地下部生体重



生育初期 = 枝分かれした側枝が短い時期

生育盛期 = 枝分かれした側枝が長く伸びた時期

衰退期 = 全体的に黄色味を帯び、茎の先端部分が枯れはじめた時期

ラウンドアップ散布薬量：10 a 当たり 2 ℓ

図 - 2 各生育ステージでのスギナの形態

